西条農高

朝倉緑の少年団（今治） 山火事で焼失 木々再び

植える

笠松山の再生を願い、コバノミツバツツジの苗木に水やりをする朝倉緑の少年団の児童（撮影・真鍋夏歩）

朝倉小学校（今治市）の「朝倉緑の少年団」が、地域の象徴である笠松山（357㍍）への植樹を通じて緑の再生活動に尽力している。

緑の少年団事業は緑化推進を目的に全国で展開され、県内では109団、約9千人（2025年12月現在）の小中学生が活動する。

同団は1973年、県内で最初に結成された。現在は全校児童が所属し、近隣を流れる頓田川の生物調査や綿花栽培、米作りなど多岐にわたる活動を展開。5月に県内で開催の全国植樹祭に向け、スギとヒノキの苗木計30本も育てている。

中でも注力するのが笠松山の植樹だ。同山は2008年8月の火災で107㌶を焼失。同団は緑あふれる山の再生を目指し、翌年3月から自生種コバノミツバツツジの植樹などを続けてきたが、昨年3月、再び大規模な山林火災に見舞われた。

鎮火後の4月末、6年生は専門家と現場に入った。山本愛心さん(12)は「木が黒くなり、あったものがなくなって悲しかった」と吐露。越智勧亮さん(12)も「声が出せないほど驚いた」と当時の衝撃を語った。

児童らは焼失したコバノミツバツツジの復活を誓い、校内で挿し木による育成に着手した。順調に生育しており、今月中に同山への植樹を行う予定だ。國貞勇貴さん(12)は「下級生につなぎ、再び緑あふれる山になってほしい」と力を込める。半世紀に及ぶ活動を通じ、古里を愛する心が次世代へと着実に受け継がれている。

（井黒咲希、真鍋夏歩、柚山一花）

目線

生徒会

2度の笠松山の火災を乗り越え活動する児童の姿に胸を打たれた。「後輩へつなぐ」という故郷を愛する言葉に強い意志を感じ、心が震えた。世代を超えて緑を守る熱意を全力で応援したい。（Y）

愛媛新聞　令和8年3月7日(土)付
掲載許可番号　d20260311-05